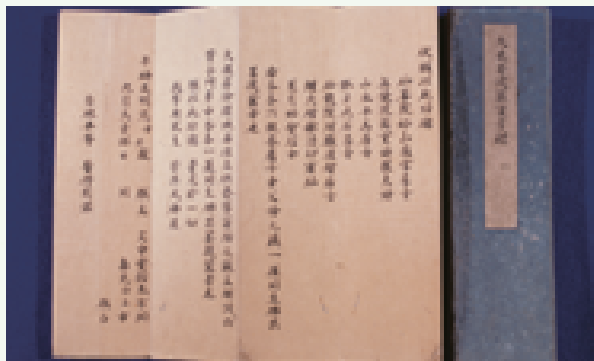




紙本墨書 大般若波羅密多經 付 けんどん箱(子~亥)12箱(南3丁目 祥安寺所蔵)



第1巻表紙と第600巻の末尾に記された発願文



祥安寺の本堂で行われた大般若会の様子
(令和7年1月18日撮影)

鈴木百淵^{ひゃくえん}は、正徳元年(1711)江戸に生まれた心学者^{しんがく}です。

庶民教育に尽くし、著書に『幼童便蒙^{ようどうべんもう}』や『元源本尋^{げんげんあなさがし}』などがあり、「上高野散人」「文中堂」とも号しました。

父の死後、仏教に帰依し、母の死後に上高野村に縁を求めて移り住み、両親の菩提^{ぼだい}を弔い、衆生^{しゅじょう}を救うため大般若波羅密多經の書写を始めます。

百淵による写経は、宝暦12年(1762)52歳の時に始まり、第600巻を写し終えたのは天明元年(1781)71歳の時でした。明治21年(1888)縁あって祥安寺が買い求め、同寺の什物となっています。

祥安寺では、毎年1月18日に大般若会^{だいはんぎあひ}を挙行し、百淵が書写した大般若波羅密多經の転読^{てんどく}を行っています。

幸手市文化遺産だより



幸手市郷土資料館

VOL.22

● 学校資料が語る幸手の教育と人物の歴史



写真1



写真2

幸手尋常高等小学校における「綴り方」教育の双璧―千野幸三郎校長(写真1)と黒田金五郎校長(写真2)―

令和6年度の幸手市郷土資料館特別展では、幸手市立幸手小学校が令和の時代まで大切に保管してきたさまざまな学校資料を展示し、学校の歴史について紹介しました。

同校は、「学制」公布に先立つ、明治5年(1872)2月の開校以来、令和3年度に150周年を迎えた伝統校です。とはいえ、一口に150年といっても、それはたいへん長い時間ですので、展示ではその一部分しか紹介できませんでした。

しかし、展示のために取り組んだ資料調査と研究で、今まで注目されてこなかった幸手尋常高等小学校の歴史的な特徴の一つが明らかになりました。それが、大正から昭和にかけて展開した「綴り方」教育の実践と、それに深くかかわった第16代校長の千野幸三郎と第17代校長の黒田金五郎という二人の校長の存在です。

その切っ掛けとなったのが、次頁に紹介した一枚の賞状でした。そして、この学校資料の謎解きの結果見えてきたものは、児童の個性を尊重する新しい教育、「大正新教育」だったのです。

今回の文化遺産だよりでは、この二人の校長の業績に着目し、調査研究に精力的に取り組まれた幸手小学校の川島正晴校長の研究成果を紹介します。



令和6年度 企画展 郷土資料館 雛まつり

令和7年3月30日(日)まで開催中!!

郷土資料館が収蔵する御殿飾り雛をはじめ、大正から昭和にかけて作られた内裏雛のほか、袴雛や幸手の際物師「松林斎亀山」作の浮世人形、昭和の香り漂う段飾り雛など、これまで収集してきたさまざまな雛人形を、雛まつりの時期にあわせて展示します。

毎年、たいへん多くの方にご来館いただき、よろこばれております。ぜひ、ご覧ください。

幸手市郷土資料館 利用案内

開館時間 午前9時から午後5時まで
入館料 無料
休館日 月曜日(祝日の場合はその翌日) 年末年始

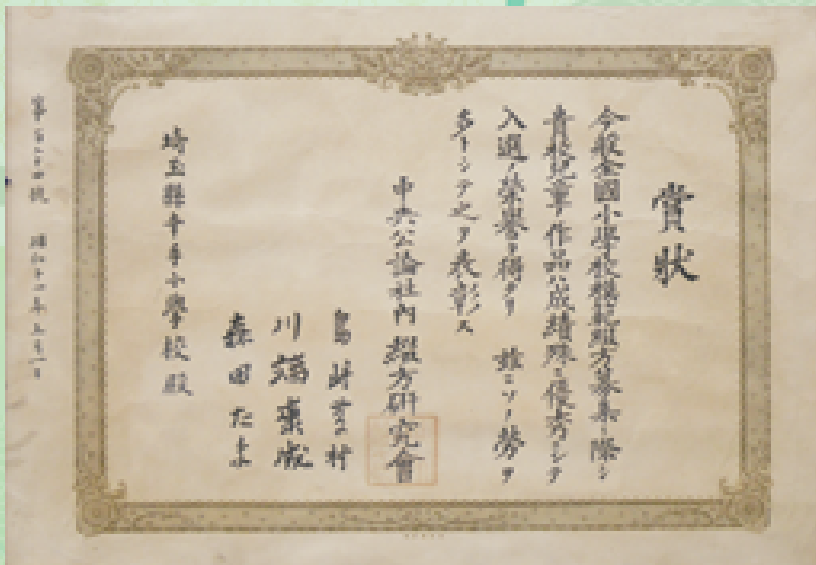
幸手市文化遺産だより 第22号

発行日 令和7年(2025)3月1日発行
編集 幸手市郷土資料館
〒340-0125 埼玉県幸手市下宇和田58-4
TEL 0480-47-2521
発行 幸手市教育委員会

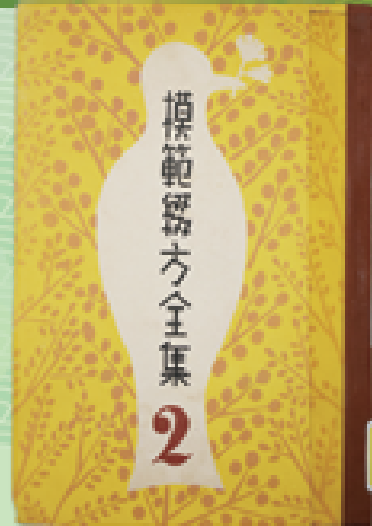


幸手市郷土資料館
ホームページ二次元コード

●【特別寄稿】幸手尋常高等小学校の「大正新教育と綴り方」 川島 正晴（幸手市立幸手小学校校長）



中央公論社内綴方研究会が幸手小学校に授与した賞状



中央公論社発行『模範綴方全集 二年生』昭和 14 年 (1939) 5 月発行
(文教大学付属図書館所蔵)

全国模範綴方入選

幸手小学校には、中央公論社から授与された「賞状」が保管されています。これまでは、中央公論社の「綴り方」募集に学校が応募して入選し、表彰されたものと受け止められてきたようです。しかし、賞状に書かれた言葉を吟味したところ、幸手小の児童の綴り方が入選し、学校の労苦に賞状が授与されたいのです。

今回の調査では、中央公論社の募集に際し、昭和 13 年 (1938) の児童の作品が応募され、尋常二年、柴崎富枝さんの「まくにん」という作品が入選したことがわかりました。中央公論社は、尋一から尋六まで各一冊に入選作品をまとめ、『模範綴方全集』として昭和 14 年 (1939) に発行

しています。選者は、島崎藤村、川端康成、森田たまでした。

しかし、なぜ中央公論社は昭和 13 年という時期に「綴り方」を募集し『全集』を出版したのでしょうか。現在、中央公論社を引き継いだ中央公論新社に問い合わせをしましたが、記録が残されていないとの回答でした。

雑誌『赤い鳥』に何度も掲載された小学生の豊田正子さんの作品を中心にした『綴方教室』や『続綴方教室』が出版され、高峰三枝子さんが主人公を務めた映画「綴方教室」が上映されたのもこの時期でした。日本の綴方教育の成果が表れた時期だったとも言えます。

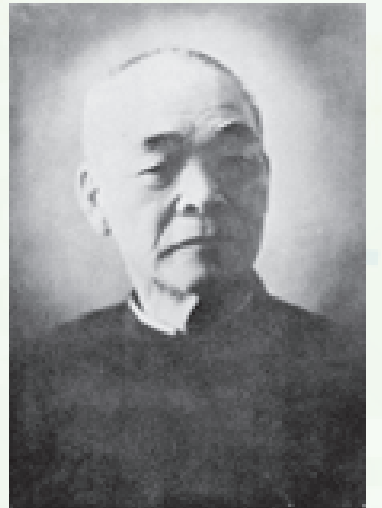
大正新教育と綴り方

そもそも「綴り方」とは、学制公布から綴字や作文として扱われた内容が、明治 33 年 (1900) の小学校令改正 (小学校令施行規則改正) により「綴方」となったことによる表記で、昭和 22 年 (1947) に「作文」となるまで続いた授業科目でした。

明治 33 年前後は、学制以来の画一的な授業や指導を批判し、変えていく動きがみられました。西洋の教育学も流入し、翻訳・出版されて、個人主義や自由を謳う児童中心主義の「新教育」が始まったのがこの時期以降で、大正期になると私立の学校づくりや附属小の研究実践で「新教育」が「自学」や「自動」、

「個人主義」や「自由」を掲げて進められたため、「大正新教育」や「大正自由教育」と呼ばれました。

同時に日清・日露戦争を経験するなど、教育勅語に基づく国家主義的な教育政策がとられる時期でもありましたが、綴り方の授業では児童が想いを表現する場として実践研究が高まります。東京高等師範附属小の芦田恵之助が提唱した「随意選題」は、児童が題材を自分で考え、想いを綴るという手法で、新教育の流行に押されて各地に広がっていきます。対照的に、綴り方の授業はしっかりと作文練習させるためにあり、課題は教師が出すべしという課題主義も、広島高等師範附属小の友納友次郎らによって強力に主張され、大正 10 年 (1921) の「小倉立会講演」を頂点とした大論争に発展します。



芦田恵之助の肖像写真
(森惟彦編 実践社発行「回想の芦田恵之助」より引用)

幸手尋常高等小学校の校長・千野幸三郎と黒田金五郎

埼玉県では、比企郡 (現・小川町) 八和田小学校訓導 (のち主席訓導) の千野幸三郎 (表紙 写真 1) が芦田のもとに通い、また小川町まで芦田を講師に呼んで研修会を行うなど、随意選題での綴り方が主流となっていました。同時期に、加須・羽生・行田で活躍した黒田金五郎 (表紙 写真 2) は、芦田に師事し、全国雑誌『国語教育』の懸賞論文に随意選題の実践をまとめて応募、「選外優秀篇」として掲載されています。

実はこの二人は、のちに千野が埼玉県の視学に、黒田は北葛飾郡の視学となって埼玉県の教育を支えた人物ですが、千野は昭和 4 年 (1929) に、黒田は昭和 8 年 (1933) に幸手尋常高等小学校の校長となり、大正新教育、とりわけ綴り方の教育を推進していたのです。

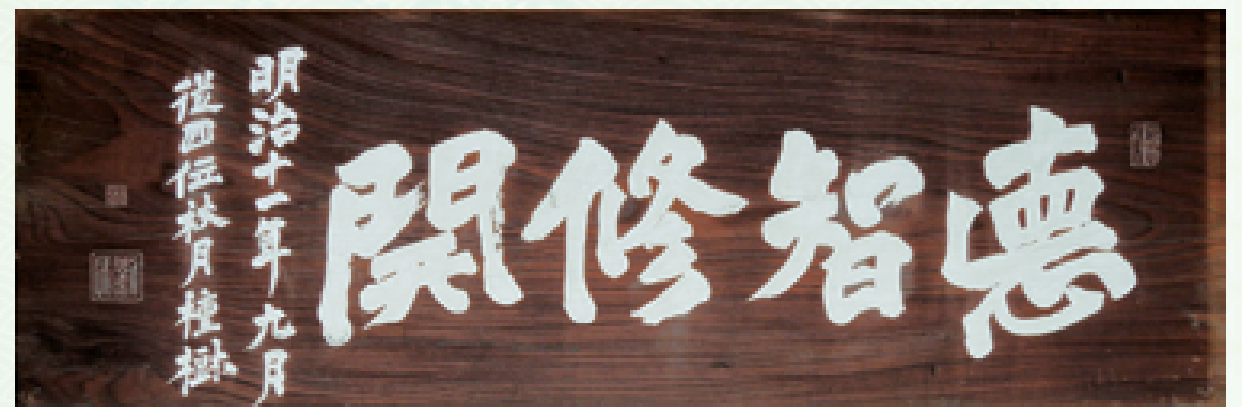
幸手市郷土資料館には、黒田金五郎校長の時期に作成された昭和 9 年 (1934) と同 11 年の文集が今日まで残されています。冒頭に挙げた綴り方の「賞状」は、黒田金五郎校長の下で応募されたものでした。

『模範綴方全集』の選者である川端康成は、「選の言葉」として、「これらの綴方は、決して子供だけの力によるものではない。最も自然に子供から生まれたと見える文章は、また教師の創作とも言へるのである。」と語りました。

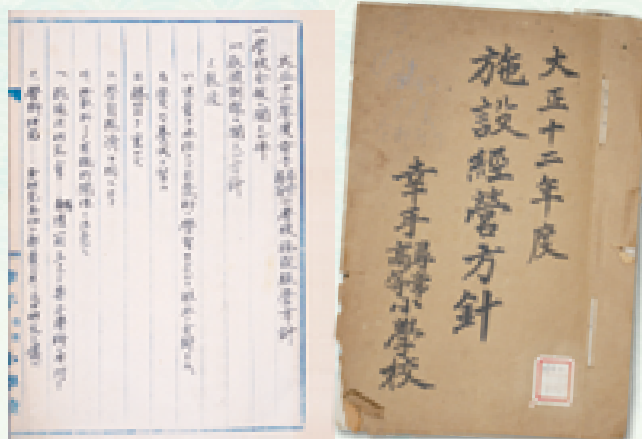
また、島崎藤村は『模範綴方全集』の「序のことば」において、「好い綴り方は、たゞ言葉を多くしたばかりで、それで生れるものでもない。萬遍なく書かうとか、面白く書かうとかいふことよりも、生き―と物を書くやうに心掛けたいものである。それには物の生命に触れなければならない。物の生命に触れるには、すなほな心なしには叶わぬことである。」と述べています。柴崎富枝さんの「まくにん」がその一つと考えると感慨深いですね。

幸手小学校の玄関に掲げられた「恵智修開」の「恵」は「すなおな心」の意です。

校是にみられる「すなおな心」で学ぶ児童をはぐくみ、児童中心主義を貫いた幸手小学校の明治・大正・昭和の教育の成果が、児童の綴り方の入選へとつながっていったのです。



あきづきたねたつ 秋月種樹が明治 11 年 (1878) 9 月に揮毫した「恵智修開」の文字がある扁額



「大正12年度 幸手尋常高等小学校施設経営方針」の「(一)教授訓練二関スル方針」の初めに「児童ヲ本位トシ自発的二学習セシムルヲ根本ノ方針トス」ことを挙げている